

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アフリカの子どもたちは夜遊ぶ。アフリカの村でこのことを最初に知ったときは驚いた。なにしろ夜中の寝静まったところに、キヤーカーと子どもたちのはしゃぐ声が聞こえてくるのである。

電灯もないアフリカの村では、夜九時ともなると、もうみんな食後の困憊もすませ寝入ってしまった。さて、それから子どもたちの時間だ。親たちは寝る。子どもたちは起きて遊ぶ。われわれの常識とは正反対のこのゲンシヨウが何なのかを彼らに随分聞いてみた。ところが、「昼間は暑いから。」といった期待はずれの答えしか返ってこない。親たちは心配しないのだろうか。しかし考えてみれば、奥地の平穏な村に人さらいなどいるよしもなし、何を心配することがあろう。子どもたちの夜の遊びについて、親たちはまったく無頓着のように見えた。

それにしても、アフリカの夜は明るい。満月の夜など、サバンナの白い砂地にくっきりと黒い人影が映る。それほど月と星の光は強いのだ。夜のゲンヤを照らす自然の光がどれほど明るいものであるか、人工照明の威力を知って久しいわれわれはすでに完璧なまでに忘れてしまっている。この明るい夜空のもとで子どもたちが遊ぶことは、考えようによってはむしろ自然なのかもしれない。

ザンビア北西部のサバンナの村に滞在していたときのことである。夜の九時ごろ、ぼくはもう疲れて小屋のベッドに横になっていた。あたりは不気味なほど静まり返っている。ところが、遠くから何やら騒々しい子どもたちの声が聞こえてきた。お祭りでもやっているのだろうか。いや、そんなはずはない。と、その子どもたちの声は、自分の小屋の方に近づいてくるではないか。いったい何だろう。やがてその喧嘩は、自分の小屋のわきを通って隣の村へと消えていった。

あまりの突然の夜の音の出来事に、ひよつとしてこれは自分だけの聞いた幻聴なのかもしれない、と一瞬自分の耳をウタガった。

ところがしばらくすると、今度は別の方角から、別の子どもたちであろう、楽しそうな歌声が聞こえてきた。もういたたまれない。むつくとベッドから起き上がり、懐中電灯を灯して声のする方へと歩いていった。

やがて懐中電灯に照らし出されたのは、八、九人の男の子たちの集団だ。ガシヨウに合わせて、何やらキラキラとしたオルゴールのような金属質の快い響きが聞こえる。彼らのなかに入ってみると、そこにはこれまで見たこともないような音具が置かれていた。

それは、古びたブリキ缶に十字型の木を取りつけ、その十字の端の三カ所にそれぞれひとつずつ自転車のベルの蓋をつけた「楽器」だった。ブリキ缶は太鼓代わりに棒で叩き、ベルはトライアングルのように金属打楽器として打つと、チンチンと快い響きを奏でる。

面白いアイデアである。そこにいた男の子の一人が考え出したらしい。

物のない貧困のなかでは、どんな廃品も彼らの工夫によって新しく生まれ変わる。スーてるのが惜しい。だからそれは、彼らにとって生活の必然だ。豊かすぎて、手にするものはすべて創意工夫をこらす隙間もない完成品ばかりという、われわれの生活のありようとはあまりにも違う。そんな豊かな社会では、逆に子どもたちの本来もっているつくり出す力は枯渇していく。むしろ貧困のなかこそ、子どもたちの潜在的な創造力は生き生きと爆発するのかもしれない。

そんな子どもたちの力の爆発を、ぼくはアフリカで何度か目にした。カフェでの出来事もそのひとつだ。

ザンビアの首都ルサカからバスで一時間ほど行ったところに、カフェという町がある。友人の一人ジョナサン・ムロンディワがそこに住んでいた。

彼の家に泊まりに行ったときのことである。彼とカフェでバスを降りると、一〇人ほどの少年たちが出迎えてくれた。ジョナサンの教え子たちだ。ジョナサンはザンビアの伝統音楽と舞踊の名手で、ボランティアで近所の子どもたちに音楽と舞踊を教えているのだった。明日は弟子たちの発表会だという。

さて、翌日彼に連れられて町から少し離れた広場に行ってみると、すでに五〇人近い子どもたちが集まっていた。あらかじめプログラムが決められていたと見え、次々と子どもたちが皆の前に出てきて踊り始めた。腰巻をつけ、太鼓に合わせて一生懸命に踊る。激しいリズムに鋭くステップを踏み、腰をふり、肩をゆする。そのリズムの歯切れよさ、機敏な手足の動き、見る者を興に乗せるショーマンシップ。

すべてが、それまで自分の知っている子どもとは違っていた。何よりも、彼らは自分自身の力でその場をつくり上げているのだった。見る者の反応に即興的に応え、みなを沸かせながら。その創造的なエネルギーと、そして伝統的なものを難なくのみ込んでしまう彼らの許容力の大きさに、ぼくはほとんど圧倒されたのである。

やがて、コミカルなスングキが始まった。彼らがそこで見せた即興的な演技の何と見事なこと。みなドラマの役になりきり、表情を変え、変身する。特別にクレンされたわけでもない子どもたちが、どうしてあそこまで演技を自然にやつのけることができるのだろうか。

大地に遊ぶ子どもたち。このカフェの光景は、ぼくの子どもも観を完全に変えた。子どもというものが本当はいかに創造力にあふれ、豊かな才能とエネルギーをもつものであるかということ知らされたからである。その驚きは、言ってみれば、ことを知らされたときのような驚きに似ていた。

それまで日本でもわらべうたのサイシユウなどで、子どもたちには随分接してきたつもりだった。しかし、子どもたちのこれほどの力の爆発を目の当たりにしたことはない。そこでは、すべてが生き生きとしていた。この大地で遊ぶ褐色の子どもたちと比べると、日本の子どもたちはまるで子どもの体をした大人のように青白く萎えていた。

人間の音楽性も創造性も、結局抑圧されたなかでは決して充分にはハッキリされないのである。あの青白く萎えた日本の子どもたちも、本当は同じ子どもたちであつたはずなのである。

(塚田健一『文化人類学の冒険』による)

問二 —— 線部1「われわれの常識」とはどのような内容ですか、答えなさい。

問三 —— 線部2「いたたまれない」とは、何にどのような気持ちをいだいたということですか、説明しなさい。

問四 —— 線部3「これまで見たこともないような音具」とはどのようなものですか。解答さんのブリキ缶にかき加えて示しなさい。ただし、部品の固定のしかたは考える必要はありません。また、絵の上手さは問いません。

問五 —— 線部4「貧困のなかでこそ爆発するのかもしれない」とありますが、筆者がそのように考えるのはなぜですか、答えなさい。

問六 —— 線部5「ぼくはほとんど圧倒されたのである」とありますが、筆者が圧倒されたのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 子どもたちが、伝統にとらわれず、見る者の反応に即興で応える様子が見事だったから。

イ 子どもたちが、先生の教えを忠実に再現し、歯切れよいリズムに乗って機敏な踊りを見せたから。

ウ 子どもたちが、伝統にもとづいた厳しいこにたえてきたことがうかがえるから。

エ 子どもたちが、伝統に反感を感じ、新たな伝統をつくり出そうと懸命だったから。

オ 子どもたちが、伝統を守りながらも、見事に自分たちの踊りをつくり上げていたから。

問七 に入る言葉として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分よりずっと若いと思っていた友人が、じつは豊富な人生経験を持っていた

イ 怒りっぽくて乱暴だと思っていた友人が、じつは思いやりのある一面を持っていた

ウ 日ごろ何気なくあいさつを交わしていた友人が、じつは天才的な音楽家であった

エ 元氣いっばいでやんちゃだと思っていた友人が、じつはかなりの読書家であった

オ 親しく付き合ってきた友人が、じつは有名な歴史上の人物の血を引いていた

問八 —— 線部6「本当は同じ子どもたちであつたはずなのである」とありますが、この「子どもたち」とはどのようなものですか。問題文中の言葉を二十五字以内でぬき出して答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

六年生の夏になつても、律子は転校する様子がなかつた。他の学校では一年程度で引越してしまつたと聞いたけど、私たちの北小には三年生で転校してきて、それからずっといた。

二期期からはいよいよ、卒業制作に取りかかることになつた。夏休みの間に、一緒に作りたい子同士グループになつて、制作の内容を相談しておくように宿題が出ていた。律子の母はもう内職をやめていて、はんだごてを使う案はなしになつたが、私は優美子と律子の三人で模造紙に大きな絵を描くことを決めた。

夏休み、私は母と県庁所在地の繁華街に出かけた。映画を観て、ご飯を食べて、買い物して、夕方近くなつて家に帰つて来た。

車庫で車を降り、買つてもらつた新しい服が入つた紙袋片手に玄関まで歩く。後ろで、母が車の鍵を閉めていた。

玄関の引き戸が、しつかり閉まつていないことに気づいた。わずかに開いた細い隙間の向こうが、どこまでのぞいても真つ暗な気がした。嫌な予感がした。

母は戸締まりしていただろうか。出かける時にはまだ家にいたおじいちゃんの軽トラは、表になかつた。きつと畑に行つてゐる。うちは留守のはずだつた。

引き戸に手を掛けると、カラカラカラカラ、と戸が滑つた。

突き当たりの廊下に、丸い背中が見えた。ひゆるつと喉を冷たい空気が通つた。驚きすぎて悲鳴も出なかつた。黄色いエプロンの紐。短い髪、

ぼつちやりの肉のついた丸い背中。気配に気づいて、律子の母が振り向く。

1 これまで何度も見た、いつもと同じはずの律子の母の顔が、今初めて見る他人みたいに引きつっている。ここはうちだ。私のうちで、律子の家じゃない。ここにおばちゃんがいるのはおかしい。

2 ワンテンポ遅れて、ようやく叫び声をあげそうになつたその時、背後から母が走つてきた。私をしゃんとさせるように、声が飛ぶ。

「ミチル！ 玄関、閉めな！」

びくつとなつて振り返る。すごい速さで駆け込んで来た母の目は、律子の母を見ていた。彼女も、私の母の顔を正面から見つめていた。母が、声に動けないでいる私を追い越し、自分の手で玄関を閉じた。外から中を隠すように。

青ざめた顔で立ち尽くす律子の母の手に、一万円札と千円札が数枚握られていた。目がまばたきをするのを忘れたように開いたままだ。目の端がひくひく動き、唇が細かく、細かく、震えるように揺れている。

「ミチル。」

3 母が私に言った。目線の高さまで腰を折り、二階の自分の部屋に行つてなさい。「と告げる。私はうなずけなかつた。

わかつてしまった。きつとうちの母もまた知つていたのだということ。私に何も告げず、話題にもせず、だけど、知つていた。

「上に行つてなさい。」

律子の母が、喜怒哀楽のどれでもない顔で宙を見ていた。その膝から下が固まったようにぐらりと廊下にまっすぐ崩れていく。母の声に負け、私はその場から追いやられた。唇をかんでどうしよう、と思う。見ちゃった。どうしよう。りっちゃん、どうしよう。

二階に行っても、部屋に入る気になれず、ずっと階段の上からのぞきこむように下を窺っていた。大人たちの声は、私の耳を気にしているのか、囁くように小さく、確かに何かの言葉を交わしていることは伝わるのに、内容が全然上がってこない。

話す声は、律子の母のものの方が圧倒的に小さく、か細く、そして少なかった。ほとんど、うちの母が話すだけ。いつもはあんなに元気な律子の母の口数が少ないことが私の足をすくませる。

わからないことだらけだった。

普段律子の家で話すおばちゃんは、全然あんなふうじゃない。なんで、急に話しかけちゃいけない、全然別の人になってしまったような気持ちになるんだろう。わからない、わからない、わからない。

しばらくして、玄関から誰かが出て行く気配がした。慌てて場所を移動して、階段の窓から外を見る。ママチャリに乗った律子の母が、エプロン姿のまま、何も持たずにノロノロと道を漕いで行く。

その後ろ姿を見ながら、あの姿のまま、おばちゃんは買い物に行くのかな、とふと思った。

うちの近くにはスーパーが一つしかない。律子の母は車の免許を持っていないと聞いたから、買い物はいつもそこでするしかない。たくさんの知り合いが来るし、うちの母だってあそこに行く。顔を合わせる。そこでお互い、どんな顔をするんだろう。今まで、優美子の母と、美貴の母と、翔太の母と、どんな顔して会っていたんだろう。スーパーのレジだって、近所の内田さんがパートで来ている。内田さんの家の子供は幹也と同級生だから、「泥棒」のことは知っているはずだ。どんな気持ちでお金を受け取るんだろう。

何にもなかったことにする。

うちの町の大人は、何にもなかったことにしてしまう。

階段を降りてリビングに入ると、皺が寄ったお金か机の上に置いてあった。疲れた表情の母が、その前で座っていた。私が入ってきたのに気づいて立ち上がる。困ったような微笑が浮かんでいた。置きっぱなしのお金を、ずっと自分のポケットに隠すようにしまった。

美貴の母親は鉢合わせした時二千円をあげてしまったと聞いたけど、うちはそうじゃなかったのだ。

「お母さん。りっちゃんのおばちゃん、泥棒なんだった。」

これまでずっと律子への裏切りのような気がして言えなかった。でも今、私が教えなかったからこんなことになった気がして、どうしても言うておきたかった。母は、いつかの優美子みたいに「知ってたよ。」と答えた。

「転校してくる前から、そういう話はあったの。だけど、律子ちゃん自身はお母さんのこととは関係ない。ミチル、わかるよね？」

「りっちゃんと仲良くしていいの？」

唇をかみながら、時間をかけて聞いた。

本当に泥棒だった。話でずっと聞いていたけど、想像以上にショックで、私は結局、これまで何にもわかっていなかったんだということを思い出した。なんで入られた家の子はみんな、平気な顔して学校に来ているんだろう。律子とも彼女の母とも、平然と話してしまうのか。

母は、警察に言うべきなんじゃないか。だけど、律子は、ここにいられなくなる。また転校するし、小さい赤ちゃんがいるのに、律子の母は警察に捕まって刑務所に入れられるかもしれない。どうするのが正しいのか、誰も正解を教えてくれない。でもこんなの、間違ってる。

答えない母に、もう一度聞いた。

「りっちゃんと仲良くしていいの？ これからも、うちに、呼んでもいいの。母がうなずいた。」

「はい。」

笑顔はなかった。母も精一杯考えながら言っていることがわかった。

「ずつと、仲良くしなさい。」

(辻村深月『仁志野町の泥棒』による)

\*注 はんだごて——金属どうしを接着する工具の一つ。 優美子——ミチルの同級生。 軽トラ——軽トラックの略。

ママチャリ——主婦などが使う、荷かごのある自転車。 美貴・翔太——ミチルの同級生。 幹也——律子の弟。

問一 ——線部1「これまで何度も見た、いつもと同じはずの律子の母の顔」とありますが、いつもの「律子の母」はどのような人物だったのですか。「人物」に続く形で、問題文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問二 ——線部2「ミチル！ 玄関、閉めな！」とありますが、母が玄関を閉めさせようとしたのはなぜですか、答えなさい。

問三 ——線部3「わかってしまった」について、次のA・Bの問いに答えなさい。

A 何を「わかってしまった」のですか、答えなさい。

B 「わかってしまった」のはなぜですか、答えなさい。

問四 ——線部4「皺が寄ったお金」とありますが、「皺が寄っ」ているのはなぜですか、答えなさい。

問五 ——線部5「鉢合わせした時」とは、具体的にはどのような時ですか、答えなさい。

問六 ——線部6「こんなの、間違ってる」とありますが、「こんなの」とは、どのようなことを指していますか。問題文中の言葉を用いて三十文字以内で答えなさい。

問七 —— 線部7「ずっと、仲良くしなさい」とありますが、この時の母の気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 母親のせいで町じゅうから仲間はずれにされる律子をふびんに感じ、全力で守ってやりたいと思っている。
- イ ミチルと律子が将来けんか別れをする運命にあることを予感し、二人の友情が続くかどうか不安を感じている。
- ウ ミチルが律子とどうつき合えばいいか、正解を教えたくないばかりに、適当な言葉でごまかそうと思っている。
- エ 律子のことと律子の母のしたこととを切りはなして考えようと思いい、つとめて理性的に判断しようとしている。
- オ 律子の母が警察に捕まってしまうと、小さい赤ちゃんの面倒はだれが見るのか、親身になって心配している。

三 次の詩を読んで、下の問いに答えなさい。

四つの海 齋藤恵美子

1 ホームの車椅子のお年寄りに  
何がしたいか、たずねてみた

買い物がしたいなあ

出前のタンメンを食ってみたい

あたしは、ケチャップをたっぷりかけた、あざやかなオムライス

そういうえば、\*外地でも、こんな遊び、いつかしたな

大正生まれの源蔵さんが

遠いひとみで、思いあたる

2 無いものを見せ合うことは、こころたのしく  
そして、むごい

おれは地面を歩きたい

3 山岸さんが、ぼつりと言う

ここでは、地面さえ、欲望なのだ

それから海が、ながめたいな

\* テレビや写真の海じゃあなくて、なまの海、みたいなあ

\* 若狭うまれの藤吉さんも

裏日本の海、をおもう

タンメンの源蔵さんは、フィリピンの

熱い海を

オムライスの小野塚さんは

瀬戸内海のゆうぐれを

あの海も、この海も、すでに老いてしまったが

引き寄せればどの波も

4 たしかな音をもっていた

行きましよう、地面へ降りて、道をきつぱりと歩きましょう

5 四つの海を、ひんやりと迂回して

椅子の車輪がすべっていく

\*注 外地——敗戦前に日本が海外で支配していた土地。  
若狭——福井県南西部の旧名。  
裏日本——日本海沿岸地域の古い言い方。  
迂回——遠回りすること。

問一 —— 線部1「ホームの車椅子のお年寄り」とありますが、この詩には「お年寄り」が何人登場しますか、答えなさい。

問二 —— 線部2「無いものを見せ合うことは、こころたのしく／＼」そして、むごい」について、次のA・Bの問いに答えなさい。

- A それ「こころたのしく」いのはなぜですか、答えなさい。
- B それ「むごい」のはなぜですか、答えなさい。

問三 —— 線部3「ここでは、地面さえ、欲望なのだ」とありますが、その理由を説明した次の文のX・Yに入る言葉を答えなさい。ただし、二か所のXには同じ言葉が入ります。

若い人にとっては  X  Y ことは当たり前であるが、  
車椅子の老人にとってはそうではないので、  
こ  Y  X になるから。

問四 —— 線部4「たしかな音をもっていた」とはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問五 —— 線部5「四つの海を、ひんやりと迂回して／＼椅子の車輪がすべっていく」とありますが、これはどういうことをたえていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 老人たちがそれぞれの思い出にひたっていた自由で豊かな時間から、車椅子に頼らなければならない現実に戻っていくこと。
- イ 老人たちが熱心に思い出を話し合って、その気分にとつぷりとひたり、昔をなつかしんだままそれぞれの部屋に向かうこと。
- ウ 老人たちがないものねだりのむなししい気持ちでしよげかえることのないうちに話を断ち切り、気持ちを外の世界に向かわせること。
- エ 老人たちが海をきつかけに外の広い世界に導かれてホームから出て行くことのないように気持ちをしずめさせ、部屋に戻すこと。
- オ 老人たちが若き日の自由にあこがれた気分で盛り上がり、それぞれの希望をかなえようと、ホームの外の海へ向かうこと。

受験番号

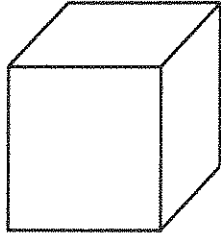
平成二十八年 灘中学校入学試験問題

国語

二日目

五枚のうちの五枚目

◎解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も字数に数えます。

問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一		
							G	D	A
							H	E	B
								(てき)	
							I	F	C
									(つた)

問五	問四	問三		問二		問一
		Y	X	B	A	
						人

問七	問六	問五	問四	問三		問二	問一
				B	A		

人物。